

ソコロ諸島紀行

はじめに

2005年12月26日から2006年1月3日までの9日間、ダイビングクルーズ船 SOLMER - に乗り、メキシコはバハ・カリフォルニア半島先端の町、カボ・サン・ルーカスから片道約22時間、約460km南に位置しているソコロ諸島、サン・ベネディクト島をダイビングしました。移動時の海は穏やかでクルーズは非常に快適でした。

【SOLMER - クルーズ】

『ダイビング』

ガラパゴス諸島、コスタリカ・ココ島と並んで大物の海としてダイバーに知られ『メキシコのガラパゴス』と称されています。この海域はマンタのクリーニングスポットと考えられていて、マンタが非常に多く特にジャイアントマンタが手の届く距離まで接近して来ます。昔はジャイアントマンタの背中に乗るマンタライディングとして有名な場所でしたが、現在はライディングもタッチも禁止されています。しかし、実際はガイドの見えないところでタッチしたり、ライディングするダイバーもいます。

マンタ以外に魚影はかなり濃いですが、ガイドがマンタ優先で案内するため、積極的にマンタから離れてダイビングするといろいろ見れます。マンタ以外にハンマーヘッド、ハシナギイルカ、ガラパゴスシャーク、ネムリブカ、アカエイ、五色エビ、ハリセンボン、ドクウツボ、アカヒメジ、マダラハタ、ベラ科の他、群れではギンガメアジ、カスマアジ、ヨスジフエダイ、ナンヨウカイワリ、ハギ科、イサキ科、フエダイ科、カマス科等が見れました。

停泊したクルーズ船の近くをザトウクジラが通り過ぎた時もありました。

水温24度、透視度30m、ナイトは無く全ダイブは19本でした。

『SOLMER - (ソルマー・ファイブ)』

夕方出港して8日目の夕方に帰港し、その日の夕食は船でも出ますがハーバーのレストランでの自由行動もOKで、その日は船で1泊して9日目の翌朝に下船します。船長以外のクルーは海のガイド3人、コック1人、食堂係1人、ボートとその他係が3人です。料理はコスタリカのSEA・HUNTER、ガラパゴスのSKY・DANCERと比較するとグレードは落ちます。部屋は通常2人部屋ですが、私だけ1人部屋で狭い部屋でしたが、ゆっくり寝れました。売店ではTシャツの種類が多くデザインはGOODで、ビール等の飲み物は有料です。

3日目のポイント「EL CANON」で1本目のダイビング前にガイドが偵察ダイブから帰ってきた後、ダイブすると透視度1mで味噌汁状態でした。SOLMER - のクルーは海のガイドもいい加減でしたが、ラウンジで食事をしたり、雑誌を読んだり、船尾のイスで昼寝をしたり、他のクルーズ(コスタリカのSEA・HUNTER、ガラパゴスのSKY・DANCER)と比べると

余り働かず、社員教育が徹底されていないと思われます。

水中はほとんどガイド無しで、アメリカの女性はサービスが悪いと怒っていました。その割にはゾディアックから SOLMER - に戻ってくると毎回すぐに飛んできて、ログを聞いてまめに記入していました。下船する前日の夜にアンケートを配り、クルー用チップと一緒に回収していましたが、ログとアンケートを会社へ届ける義務があるようです。

ゾディアックで SOLMER - の周りを一周して撮影しましたが、年配のイタリア人男性がビデオにお尻を向けて何回も水着を脱ぐので編集でカットし、SOLMER - の使える映像がかなり減りました。また、若い時はかなりの美人と思われる40才前後のイタリア人女性に何故か気に入られ、夕食の度に呼ばれて横に座られました。全然分からないイタリア語が飛び交う中でイタリア人グループと一緒に食事をしましたが、英語とスペイン語が堪能なこの才女が時々グループの会話を英語に翻訳してくれました。

ブリーフィングの時に私のサムライフードをガイドに被らせて撮影すると、イタリア人歯科医の男性がサムライフードを被って記念撮影をしてハシャいでいたので、夕食の時に予備で持参した古いサムライフードをプレゼントすると、クルーズの記念になると言って非常に喜んでいました。

コスタリカ ココ島のSEA・HUNTERクルーズでイタリア人男性3人がいました。ダイビング最終日前夜のサヨナラパーティー後にビデオテープを交換してカメラ置場に置いていました。帰国後のテープ分析時に最後のテープを再生した時、いきなり男性数人のアソコがアップで映っていてイタリア語で騒いでいました。

イタリア人は好奇心が旺盛で、陽気で、いたずら好きですが、時々ビデオ編集時に『アッ、やられた』と呆れてしまいます。

私が制作したDVDを今回のクルーズにも持参していたので、船に設置している大型液晶テレビで夕食後に観ていると、画質や編集レベルが高いガラパゴスやコスタリカのDVDには余り反応せず、12年前の画質の悪いアナログ時代のジンベエザメ(オーストラリア エクスマス)の時には参加者とクルーのほとんどがテレビの前で食い入るように観て、終わった時には全員が拍手喝采でした。今回の参加者はガラパゴスやコスタリカのココ島へ行ったダイバーが多いことが後で分かり、ジンベエザメは本当に貴重な魚なんだと改めて思いました。

時々、食堂係とボート係がスペイン語の下手な日本人に親切にスペイン語を教えてくださいました。

ダイビング最終日の昼食後の休憩中にマンタが1匹、クルーズ船の水面近くに寄ってきたので、イタリア人ダイバーが水面のマンタを追っかけまわし、船の周りをグルグル回り始めました。そのマンタを2階デッキからビデオ撮影するため、マンタに合わせて2階デッキをグルグル回っている時に2階デッキ手摺の柱(ボックスでなく鉄板)に右足の親指と人差し指の間を挟み、人差し指を骨折しました。この鉄板でイタリア人も同様にケガをして血だらけになっていました。コスタリカ、ガラパゴスなど他の船は鉄板型でなくボックス型のため

安全ですが、SOLMER - は鉄板型のため十分に注意が必要です。

尚、このマンタの映像はビデオ編集でカットされました。

ダイビング最終日に骨折したのでダイビングにはほとんど影響がありませんでしたが、その後「エルタヒン」と「テオティワカン」の世界遺産2ヶ所の観光でピッコを引きながら1日中何時間も撮影し、帰国したのは骨折の約1週間後でした。

今回のSOLMER - のクルーズ費用は2,995ドル(他にチップ250ドルが必要です)。

【エルタヒン】

600年～700年に建設され1200年頃に滅亡し、造ったのはマヤ人と血縁関係にあったワステコ人が有力説で、1785年スペイン人のエンジニアによって偶然発見されました。ピラミッド、球戯場が復元されていますが、発掘はまだ10分の1でジャングルの中にまだ多くの建造物が隠されているそうです。『タヒン』とはこの地方のトナカ人の言語で雷を意味しています。

【テオティワカン】

メキシコ・シティから50km北にあり、メキシコ最大の宗教都市国家で紀元前2世紀頃に建造され8世紀頃に滅亡しました。

ここの巨大なピラミッドを建設したのはテオティワカン人と言われ、最盛時の西暦450年頃には約15万人以上が生活していた。文字があったと言われていますが、まだ解明されていません。

太陽のピラミッドと月のピラミッドと大きなピラミッドが2つあり、太陽のピラミッドは高さ65m、1辺が225mの神殿で、世界第3位の大きさを誇っています。月のピラミッドは高さ42m、底辺が150m×130mの神殿で、このピラミッドの方が重要度が高く、大きな宗教儀式はここで行われていたと推定されています。

繁栄した理由は金属のない時代にステンレスナイフより良く切れる道具を黒曜石から製造して兵器や刃物に利用し経済を発展させた。

滅亡した原因は権力の象徴であるテオティワカンの壁面の漆喰が石灰を溶かして塗りかえるために、毎年森林(松の木)を大量に3万トンも伐採して自然破壊をしたため、農耕が出来なくなり拡大した人口増加に耐えられなくなった。最終的には暴動による放火で都市が大火事で破壊され放棄された。

【カボ・サン・ルーカス】

ロスカボスにある2つの町の1つで、アメリカ人の冬のリゾート地になっています。理由はハーバーの係留費用が安く、アメリカ船籍のクルーザーやボートがたくさん係留されていました。

現在の人口は約85,000人で、地方から来た人がLOCAL PEOPLEと呼ばれて差別されていました。

【パパントラ】

メキシコ・シティへ帰るためポサリカの空港に着くと、飛行機が故障したので代替りの飛行機が来ることになり、そのフライトが約5時間遅れになるため、余った時間でパパントラを観光しました。

メキシコ湾岸から30km内陸にあり、エルタヒン観光の拠点になっています。ここにはパパーン、パパーンと甲高く鳴くパパンと言う鳥が生息し、パパントラの地名がその鳥に由来しています。

ここには伝統的儀式のボラドーレス（空飛ぶ人）があります。高さ30mあるポールの上に5人の男が乗り、その内の4人が足に巻いたロープで逆さ吊りになり、回りながら柱に巻き付けたロープがほどけていくと共に徐々に地上に降りてくる儀式で、雅楽のような音楽が流れる中で行われる厳かなパフォーマンスです。他の地域にも同じような儀式がありますが、このボラドーレスは正式と言われている。

【首都メキシコ・シティー】

人口2000万人の大都市で、スペイン人がアステカ文明の神殿や宮殿を壊した石材でスペイン風の市街地が築かれています。

標高約2,000mに位置しているため気温はカボ・サン・ルーカスと比較すると低く、朝晩7度前後で昼は25度前後にもなり、寒暖の差がかなり激しいので服装には充分注意が必要です。

また、カボ・サン・ルーカスとの時差が1時間早く、国内の乗り継ぎには充分注意が必要です。実際、カボ・サン・ルーカスからメキシコ・シティー経由でポサリカ行きのフライトで1時間以上余裕があったので、ゆっくり休んでいた時、この時差を思い出し慌てて搭乗口へ走り、ギリギリセーフで何とかフライトに間に合いました。

車が多いため大気汚染が非常に深刻で、政府は車のナンバーを奇数と偶数で利用できる曜日を分けました。しかし、貧富の差が大きい国のため、車を所有している富裕層は奇数と偶数の両方の車を所有するという結果になりました。

【その他】

私以外に日本人男性が2人いましたが、クルー及び他のダイバーとほとんど会話をしないで、いつも2人で食事をしていました。2人の内、年配の人はまったく英語がダメでしたが、若い人は少し喋れるのに何故か外国人とほとんど会話をしませんでした。このような日本人は他の海でも今までたくさん見てきましたので驚きはなかったのですが、イタリア人から2人が会話しない理由を聞かれて返事に困りました。日本人ダイバーは2人でなくても、グループでも閉鎖的で外国人と会話しない光景を良く見ます。これは非常に悲しいことで勿体無いことです。私は英語がペラペラではありませんが、様々な国のダイバーと海の情報交換をしたいので、知っている単語を並べて食事の度にいろんな人と会話をするととても楽しいクルーズになりました。

今回の撮影は60分デジタルテープで水中3本、陸上5本の合計8本です。
ビデオのタイトルは『The Paradise of Manta ray』
に決定しました。

(参考) 撮影機材は以下の通りです。

ビデオカメラはSONYの3CCD『VX-1000』2台。

1台目は水中専用、2台目は水面と陸上専用及び水中用のバックアップ。

ビデオライトは米国製のSUNREY『S-PRO』2灯(太陽光と同じ白色灯)。

ハウジングは水中用が米国製のSEA&SEA『VX-1000PRO』、水面用は神奈川の改造SHOPによる特注の改造ハウジング(10m防水)。

以上
浜谷 優